

# 老人看護学の臨地実習で得た学びの分析

島田広美<sup>1)</sup> 八島妙子<sup>1)</sup> 佐藤弘美<sup>2)</sup>

## 要 旨

現在の教授方法で、学生が老人看護をどのように捉えたかを明らかにし、今後の実習指導のあり方を探ることを目的とした。

対象は平成11年度の3年生80名中、研究に同意の得られた77名である。老人看護実習終了時に書かれたレポートから、学生が捉えた高齢者の特徴と老人看護の特性についての記述内容を整理・分析した。

結果、学生は、高齢者の特徴と老人看護の特性についてそれぞれ8つの視点から捉えていた。高齢者の特徴：①その人の生きてきた歴史が背景にある、②人に関われる喜び、③援助を受けることで生じる気持ち、④老化の影響、⑤身体機能の変化の表れ方、⑥痴呆症をもつ高齢者、⑦健康問題の生活への影響、⑧高齢者にとっての家族の存在。老人看護の特性：①援助姿勢、②生きがいや楽しみへの支援、③自尊心をそこなわない援助、④老化や障害への援助、⑤痴呆症をもつ高齢者の理解、⑥予防的看護援助、⑦家族への援助の必要性、⑧様々な職種との連携。

学生は、いくつかの視点から高齢者の特徴を捉えて、それを手がかりに高齢者の理解を深め、その人らしい生活に向けての援助の必要性を実感し、老人看護の特性を捉えていた。このことから、実習指導のあり方を検討した。

キーワード：看護学教育、老人看護学、臨地実習

## I 緒 言

従来、看護学教育において、高齢者の看護は、成人看護学の中の一部に位置付けられていた。しかし、高齢社会に突入し、高齢者のための看護の充実が期待されるようになった。このような状況を背景に、高齢者の看護が成人の看護の延長線上にあるのではなく、独自の視点が必要であることや高齢者の看護について専門教育の必要性が強調されるようになった。1990年の看護教育カリキュラムの改訂によって、老人看護学が独立して柱立てされ、さらに1996年の改訂において、老年看護学実習が立てられ、その重要性が述べられている。

本学では、2年次に老人看護論Ⅰ・Ⅱの終了後、健康な高齢者の発達課題を理解し、発達課題達成に関わる看護のあり方を考えることを目的にした生涯発達課題実習を1日行っている。そして、3年次に2週間の老人看護実習を行っている。

わが国における老人看護学の教育の歴史はまだ浅く、老人看護学の教育内容や展開方法について報告や検討が行われている段階である。高齢者に対するイメージが看護に取り組む姿勢の形成の源であり、看護の質・内容を定めるものであるといわれている<sup>1)</sup>ことから、高齢者のイメージの変化から老人看護実習の有効性<sup>2)</sup>や学習内容<sup>3)</sup>との関連について検討が行われている。また、老人看護実習の学生の学びについていくつか報告<sup>4-6)</sup>されているが、病院や特別養護老人ホームが実習場となっており、老人保健施設と訪問看護の場を実習場とした学生の学びを分析したものはほとんど見当たらなかった。

そこで、本学の現在の教授方法で、学生が老人看護をどのように捉えたかを明らかにし、この結果をもとに今後の実習指導のあり方を探ることを目的とする。

## II 研究方法

### 1. 対 象

老人看護実習を受講した本学の平成11年度の3年

1) 川崎市立看護短期大学

2) 石川県立看護大学

生80名に対して、全実習終了後、文書と口頭にて研究の目的、方法、研究への協力を拒否する権利と研究への参加の有無は成績には一切関係ないこと、研究をまとめる時も集計したデータとしてのみ利用し、個人が特定されることがないことを説明した。研究に同意の得られた77名を対象とした。

## 2. 分析方法

データは同意の得られた対象77名の老人看護実習終了時に「老人看護とは 老人看護実習を終えて、老人看護として捉えたことを記述しなさい。」というテーマで書かれたレポートである。矢口ら<sup>7)</sup>は、レポートには学習者が一番印象深く受け取ったもの、問題意識を強くもったものが表れると述べている。レポートに学生が学んだことすべてが記述されるわけではないが、学生が老人看護実習を終えて、今までの学習と臨地実習を振り返り、実感として捉えた老人看護の内容が明らかになると考えた。そこで、レポートから、学生が捉えた高齢者の特徴と老人看護の特性についての記述内容を取り出し、分類した。

## 3. 期間

平成11年5月～平成12年3月

## 4. 老人看護実習の方法および内容

### 1) 実習目的・目標

表1に記す。

表1 老人看護実習の目的・目標

目的	老年期の人の特徴と、老人看護の特性について理解を深めるとともに、加齢や老人特有の健康問題を持ちつつ人生の最終ステージを生きている老人とその家族が、それぞれの健康問題に対処しながらその人らしく課題を達成していくことを援助する上での基礎的実践能力を養う。
目標	<p>1 老人の現在の姿だけでなく、その人の生きてきた歴史や残された未来、価値観、家族・人間関係などに目を向けた対象のとらえかたができる。</p> <p>2 老人に生じやすい健康問題と生活機能障害の要因、経過が理解でき、継続的、予防的看護活動の必要性と看護方法が把握できる。</p> <p>3 生活機能の障害が老人の人生課題や家族の役割機能に及ぼしている影響を理解でき、看護が老人の課題達成や家族機能の再構築に具体的にどのように関わっているかが把握できる。</p> <p>4 老人に接した際に自分自身の感情や態度を分析し、老人とのコミュニケーションのとり方を学び、コミュニケーションにおける自己課題を明確化することができる。</p> <p>5 老人の健康生活を支えている家族や保健・医療・福祉システムなど社会資源の活用や、様々な職種との連携・協同のあり方の理解を深め、看護の役割を把握する。</p>

### 2) 学生数および実習期間

80名の学生を10名ずつに分け、川崎市内の一つの老人保健施設においては2つのフロアに学生をわけて8日間、川崎市内の2つの病院の訪問看護部門においては3つのグループにわけて2日間の実習を行った。

### 3) 実習内容

老人保健施設では入所者を1名受け持ち、高齢者の健康生活をアセスメントし、看護計画を立案し、実施、評価する。

さらに、病院の訪問看護部門では、退院後在宅ケアを必要とする高齢者1名を受け持ち、高齢者の健康生活をアセスメントし、日常生活援助、家族の介護支援を行う。

### 4) 実習の進め方

老人保健施設においては、実習初日に、施設内のオリエンテーションと受け持ちの高齢者の紹介を行い、受け持ちの高齢者の情報収集を行う。情報として、看護・介護職員のケア記録やカルテ、また、施設で立案されている個別のケアプランから、ケアの目標と内容を把握する。これらの情報を基に、実際に受け持ちの高齢者と接することや看護・介護職員から直接、援助方法の指導を受けることで、高齢者に生じやすい健康問題と生活機能障害の要因、経過を理解し、継続的、予防的看護活動の必要性と看護方法を把握することで高齢者への看護の基礎的実践能力を養っている。

また、病院の訪問看護部門においては、スタッフの紹介とその日のミーティングに参加し、訪問ケースの紹介後、学生が受け持つケースの選択と情報収集を看護記録及びカルテから行い、看護婦と一緒に訪問し、在宅ケアを必要とする高齢者への看護の基礎的実践能力を養っている。

### 5) 実習における指導体制

老人保健施設においては、老人看護領域を担当している助手1名が毎日、非常勤の実習指導者1名が週に2日、学生と共に施設に入って、学生が実習目標を達成できるように個別に支援している。また、実習4日目または、5日目に行う中間カンファレンスにおいて、受け持った高齢者の紹介と看護計画を発表し、老人看護論を担当している教員1名と学生で、ディスカッションしながら、看護過程を整理し、看護活動の発展を促す機会を設けている。

学生と施設職員との連携の場は、朝の申し送り  
と午後の報告の場があるほか、食事、排泄、入浴  
など日常生活援助場面で、看護職員と介護職員と  
の連携・協力を体験できると共に、機能訓練、レ  
クリエーションを通して、理学療法士、作業療法  
士を含めた多職種との連携を学べる場としている。

最終日には、臨地の指導責任者、介護職員1名、  
療養課長、教員2名、非常勤の実習指導者1名と  
学生とで、2週間の看護のまとめを行い、その中  
で、学生同士が学びを共有するとともに、看護過  
程の吟味や看護活動の意味付け、学生の自己理解  
を促す場を設けている。

また、病院の訪問看護部門においては、教員1  
名と非常勤の実習指導者1名と臨地の指導責任者  
で学生の学習を深めるようにかかわっている。

### Ⅲ 結果

レポートの記述内容を高齢者の特徴と老人看護の  
特性毎に取り出し、分類した。その結果、学生はそ  
れぞれ8つの視点から捉えていた。それぞれの視点  
について学生自身が記述した表現から概観する。以  
下、視点を【 】で、学生の記述は「 」で示す。

#### 1. 学生が捉えた高齢者の特徴(表2)

##### ①【その人の生きてきた歴史が背景にある】

学生は、高齢者といろいろな話をしていく中で  
「様々な経験をし、今を過ごしている。」という  
ことに気付いていた。また、食事や入浴といった  
場面で、施設での集団生活にあわない高齢者もい  
るが、高齢者や家族から以前の話聞くことで、  
「人生の中には多くの出来事があり、その積み重  
ねの中でその人らしさが築かれてきた。」とその  
人の行動を理解できたり、「機能的な部分の低下  
はあったとしても、その人らしさが残っているし、  
そうやって生きてきた分だけしっかりとその人に  
しみこんでいる。」と感じていた。

##### ②【人に関われる喜び】

学生は、「“もう年だしいつ死んでもいいん  
だ”と話す高齢者が、毎日、作業療法に行き、箱  
を作っているのをみて、人にあげることが趣味と  
なり、生きがいになっている。」と感じたり、  
「自分なりの望みやしたいことをたくさんもっ  
ている。」ことに気付いていた。また、「“体は思う  
ように動かないし、やりたいことは特に何もない。  
後はもうゆっくり死ぬのをまつだけ”と話してい

た高齢者が、昔の話を懐かしそうに聞かせてくれ、  
その時の顔はとてもうれしそうで、生き生きとし  
ていたのが印象的であった。」ことから、高齢者  
が「思い出を大切にしている。」ことに気付いて  
いた。

##### ③【援助を受けることで生じる気持ち】

学生は、高齢者が援助を受ける際に、“すまな  
いね”、“悪いね”、“迷惑をかけるね”という言  
葉を聞き、「介護する側に申し訳ない気持ち。」  
を持っていることを感じたり、「高齢者は自分の  
ことができなくなって、人に頼らざるを得ないとい  
う状況になると特に自尊心を無くしてしまう危  
険性がある。」ことや「自分を出す機会まで失っ  
てしまう。」ということに気付いていた。

##### ④【老化の影響】

学生は、施設の中で様々な高齢者に出会って、  
「老化の進行は多様で、個人差がみられる。」と  
いった老化に個別性がある事や「機能低下などの  
悪影響を引き起こす。」といった老化の影響を実  
感していた。

##### ⑤【身体機能の変化の表れ方】

学生は、高齢者との関わりを通して「動作が  
ゆっくり」であることや、臥床がちな高齢者をみ  
たり、トイレに行くたびに疲れたという高齢者の  
言葉を聞き、「活動量の低下」や「体力の低下」  
を実感していた。

##### ⑥【痴呆症をもつ高齢者】

実習施設で受け持つ対象として多い痴呆症を持  
つ高齢者について「ひとまとまりでなく様々であ  
る。」と痴呆症の程度の個別性や「自分の世界を  
持っていて、その世界の中で生活している。」と  
痴呆症をもつ高齢者の世界についての理解や、  
「人との関わりが減少することで痴呆症が進行す  
る。」と痴呆症の進行の原因が記述されていた。

##### ⑦【健康問題の生活への影響】

学生は、老人保健施設という高齢者の生活の場  
で高齢者と関わることで、「疾病や障害が二次的  
な障害をまねきやすい。」「疾病をもつと身体面  
に限らず、精神活動や社会活動の障害につなぐ  
る。」と生活への影響を理解し、「完治が難し  
い。」「一度失った生活機能を再構築していくこ  
とは非常に難しい。」と一度生じた問題を解決す  
ることの困難さが記述されていた。

⑧【高齢者にとっての家族の存在】

老人保健施設や訪問看護部門で高齢者のこれからの生活を考えた時に「介護者が高齢であることの問題」を実感したり、日中臥床がちな高齢者が、家族が面会に来ると車椅子に乗って楽しそうに話している場面をみて、「1人で入所している高齢者にとって、家族の存在というのは大きな存在ではないだろうか。」「配偶者や家族の有無で希望や楽しみを失いつつある人もいる。」ことを感じていた。

静岡に住んでいたことを話したり、表情から気分転換になっていることが伝わってきたことで、「心地よいと感じる時間を提供する。」ことの大切さを学んでいた。また、施設の中では、時間はあるが、やることがないという高齢者が多いが、午前・午後の体操やゲーム、作業療法として行われている小物作りなどを行っている高齢者の楽しそうな表情や自分の作品を見せてくださる時のうれしそうな表情をみると、自分の楽しめる時間を持つということが大切であることに気付いた。そして、施設の中で高齢者自身が楽しみを見つけることは困難なことが多いので、看護者の方から声をかけて、高齢者が何か「楽しみを持ちやすい状況を作るように関わっていく。」ことが大切であることを学んでいた。また、学生は、写真が趣味で、歩ける様になったら、また写真仲間と撮影旅行に行くことを目標にリハビリに励む高齢者の姿をみて、「その方の望むような生活に近づけるような援助。」の大切さを学んでいた。

2. 学生が捉えた老人看護の特性（表3）

①【援助姿勢】

「価値観を尊重し、その人らしさを大切にした援助。」「生活背景を考えた援助。」が大切である事をほとんどの学生が記述していた。

②【生きがいや楽しみへの支援】

学生は、臥床傾向にある高齢者と屋上に散歩に行き、富士山を見た時に、その高齢者が、以前、

表2 学生がとらえた高齢者の特徴

視 点	学 生 の 記 述 例
①その人の生きてきた歴史が背景にある	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者は過去の出来事・考えが大きく影響している</li> <li>・機能的な部分の低下はあったとしても、その人らしさが残っているし、そうやって生きてきた分だけしっかりとその人にしみこんでいる</li> <li>・様々な経験をし、今を過ごしている</li> <li>・人生の中には多くの出来事があり、その積み重ねの中でその人らしさが築かれてきた</li> </ul>
②人に関われる喜び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思い出を大切にしている</li> <li>・自分なりの望みやしたいことをたくさんもっている</li> <li>・望んでいることが生きる喜びとなる</li> <li>・人にあげることが趣味となり、生きがいになっている</li> </ul>
③援助を受けることで生じる気持ち	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護する側に申し訳ない気持ち</li> <li>・自尊心を無くしてしまう危険性がある</li> <li>・自分を出す機会まで失ってしまう</li> </ul>
④老化の影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・老化の進行は多様で、個人差が見られる</li> <li>・機能低下などの悪影響を引き起こす</li> <li>・人によって程度が異なる</li> </ul>
⑤身体機能の変化の表れ方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動作がゆっくり</li> <li>・体力の低下</li> <li>・活動量の低下</li> </ul>
⑥痴呆症をもつ高齢者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとまとまりでなく様々である</li> <li>・自分の世界を持っていて、その世界の中で生活している</li> <li>・人との関わりが減少することで痴呆症が進行する</li> </ul>
⑦健康問題の生活への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疾病や障害が二次的な障害をまねきやすい</li> <li>・完治が難しい</li> <li>・疾病をもつと身体面に限らず、精神活動や社会活動の障害につながる</li> <li>・一度失った生活機能を再構築していくことは非常に難しい</li> <li>・発熱などによる体力低下がねたきりや生活機能の喪失につながりやすい</li> </ul>
⑧高齢者にとっての家族の存在	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護者が高齢であることの問題</li> <li>・家族の存在というのは大きな存在ではないだろうか</li> <li>・配偶者や家族の有無で希望や楽しみを失いつつある人もいる</li> </ul>

③【自尊心をそこなわない援助】

学生は、看護婦が下剤の調整をする際に、高齢者の身体面だけでなく、高齢者の入浴などのスケジュールを考慮していることを聞き、「生活の中で高齢者が失敗と感ずることを防ぐ援助。」であると学んだり、入浴を嫌がる高齢者を受け持ち、施設のスケジュールの中では無理に進めてしまうことが多く、そのことがその人の自我を脅かしていることに気付き、高齢者の話を良く聞き、その方が入浴をしてもいいという環境を作ることを通して、「自己概念を崩さないように援助。」することの必要性を学んでいた。

④【老化や障害への援助】

「その人のもつペースに合わせる、待つことが

必要。」、「活動と休息のバランスを考えること。」、「高齢者の生活を支える。」、「家族の支援、社会資源、介護用具の工夫の重要性。」などが記述されていた。

⑤【痴呆症をもつ高齢者の理解】

学生は、その高齢者がどんな人なのかを理解して関わると高齢者のとっている行動の意味がわかり、コミュニケーションがとりやすくなったことから、「生活習慣や痴呆症の状態を十分知った援助。」の有効性に気付いたり、「言葉以外の表情や目の動き、動作の観察も大切。」、「行動の意味を考える。」などが記述されていた。

⑥【予防的看護援助】

「生活機能の低下を防ぐ援助。」、「生活の質の

表3 学生がとらえた老人看護の特性

視 点	学 生 の 記 述 例
①援助姿勢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・価値観を尊重し、その人らしさを大切にした援助</li> <li>・生活背景を考えた援助</li> <li>・大切にしているものを知り、支える</li> <li>・習慣や考え、気持ちにそってケアを行う</li> <li>・生きてきた時代背景を把握する</li> </ul>
②生きがいや楽しみへの支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その方の望むような生活に近づけるような援助</li> <li>・毎日をどう楽しく、満足に生活するかを知り援助</li> <li>・楽しみを持ちやすい状況を作るように関わっていく</li> <li>・心地よいと感じる時間を提供する</li> </ul>
③自尊心をそこなわない援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自尊心を大切にす</li> <li>・羞恥心、精神面に配慮した援助</li> <li>・自己概念を崩さないように援助</li> <li>・生活の中で高齢者が失敗と感ずることを防ぐ援助</li> </ul>
④老化や障害への援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疾病や障害をもちながら日常生活に適応できる</li> <li>・高齢者の生活を支える</li> <li>・家族の支援、社会資源、介護用具の工夫の重要性</li> <li>・その人のもつペースに合わせる、待つことが必要</li> <li>・活動と休息のバランスを考えること</li> <li>・自分でやることだけが自立への援助ではない</li> </ul>
⑤痴呆をもつ高齢者の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活習慣や痴呆症の状態を十分に知った援助</li> <li>・言葉以外の表情や目の動き、動作の観察も大切</li> <li>・行動の意味を考える</li> <li>・その人の世界を大切にしながら関わる</li> <li>・そばにいただけでも、心細さや不安が軽減できることがある</li> </ul>
⑥予防的看護援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活機能の低下を防ぐ援助</li> <li>・普段からの健康作りや予防策が大切</li> <li>・生活の質の維持に努める</li> <li>・心身の諸機能の低下を予防するような目標を立てる</li> </ul>
⑦家族への援助の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・老人を支える家族も援助の対象</li> <li>・介護者の健康状態に注意を払うこと</li> <li>・家族に十分な情報提供</li> <li>・家族の介護負担に対する配慮</li> <li>・教育的支援、精神的支援が必要</li> <li>・家族と高齢者の関係の調整</li> </ul>
⑧様々な職種との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在宅での生活に戻れるような調節が大切</li> <li>・施設と在宅での援助の継続</li> <li>・取り巻く人々の協力が必要</li> </ul>

維持に努める。」などが記述されていた。

#### ⑦【家族への援助の必要性】

退所後、家に帰る高齢者への排泄の援助を考える際に、高齢者にとってやりやすい方法というだけでなく、自宅に帰った時に家族にとってどのように介護すれば介護量が減るかを考えて、「家族の介護負担に対する配慮。」を行ったり、「介護者の健康状態に注意を払うこと。」「家族に十分な情報提供。」が必要であることが記述されていた。

#### ⑧【様々な職種との連携】

老人保健施設や訪問看護の場面において「在宅での生活に戻れるような調節が大切。」「施設と在宅での援助の継続。」「取り巻く人々の協力が必要。」であることが記述されていた。

## IV 考察

### 1. 学生が捉えた高齢者の特徴について

高齢者の今の姿を外観の変化から捉えた印象は、個人差はあるが、弱々しく見える時もあり、ネガティブな印象を持つ傾向にある。このような高齢者に対するイメージは高齢者の看護にマイナスの影響を与えやすい<sup>9)</sup>。当短大では、健康な高齢者を対象とした生涯発達課題実習を行っており、その中で、学生が高齢者を肯定的に捉えられるような機会を提供している。そして、老人看護実習を通して、高齢者と接していくことで、高齢者を今の姿だけでなく、その人の生きてきた歴史を含めて理解することで、はじめてその人らしさを捉えることができるということを学んでいた。【その人の生きてきた歴史が背景にある】ことを手がかりに、個人として尊重し、援助に個別性を見出すことができ、その重要性について学んでいたと考えられる。

学生は、高齢者と関わっていく中で、高齢者のあきらめや疲労を感じる一方で、さらに関わりを深めていくと、大切にしていること、希望を持っていることにも気付き、【人に関われる喜び】が高齢者にとって大切なことであると感じたり、そこに働きかけることが大切であることに気付いたと考えられる。

学生が受け持った高齢者は、日常生活に何らかの援助を必要とする高齢者であったことから、日々、高齢者に対して援助を行う中で、高齢者の中には、遠慮や申し訳なさといった気持ちが生じていること、

また、【援助を受けることで生じる気持ち】によっては、「自分を出す機会まで失ってしまう。」ことにつながったり、「自尊心の低下につながる。」ことを感じ、日常生活に影響を及ぼしていることに気付いたと考えられる。

【老化の影響】や高齢者の【身体機能の変化の表れ方】、【健康問題の生活への影響】については、老人看護論Ⅰで、学んでいる。実習において、実際に様々な高齢者と会うことで、「個人差が見られる。」ことや看護を展開する上で、アセスメントを行う中で、老化の身体機能への表れ、生活への影響を実感をもって把握できていたと考えられる。

【痴呆症をもつ高齢者】については、学生が受け持つ高齢者の中に痴呆症を持つ高齢者が含まれていたため、学生はこの実習で初めて痴呆症を持つ高齢者と接し、戸惑いを感じ、様々な痴呆症を持った高齢者と出会い、個別性に気付いていた。関わりを持つ中で、痴呆症をもつ高齢者の世界を理解していた。

【高齢者にとっての家族の存在】については、施設の中で家族の面会場面にであったり、訪問看護の場面で実際に家族介護者に話を聞く機会を得ることで、これからの高齢者の生活を考えた時に、介護者の問題や家族の存在が高齢者にとって大きいと感じ、高齢者と家族と一緒に考えることの重要性を学んでいたと考えられる。

### 2. 学生が捉えた老人看護の特性について

永田<sup>9)</sup>は、『高齢者看護は、本人の生活の中のバックグラウンドの中から、今本人に起きている状態の根拠と本人の心身の力をいきいきと高めるための手がかりを丁寧に見出す、それらを元に生活全体を豊かにしていく一連のダイナミックな働きかけである』と述べている。【援助姿勢】は、老人看護だけに特有なこととは限らないが、学生は、人生を重ねてきた高齢者と接し、その人らしい生活のあり方への援助を行うことで、援助がスムーズに行えたり、高齢者がいきいきとなる様子を見て、気付いたことである。援助を考える時や実施する際に、その人の生きてきた歴史に目を向け、「価値観を尊重し、その人らしさの大切にした援助。」の重要性を学んだといえる。

高齢者の中にはあきらめや疲労を感じている者もいるが、施設で行われているレクリエーションや作業療法での作品作りに参加した時に、何かのきっか

けで楽しそうにしたり、充実感を感じていることに学生は気づき、【生きがいや楽しみへの支援】が高齢者を援助していく上で重要なことであると学生は学んだと考えられる。

学生が受け持った高齢者は日常生活に何らかの援助を必要とする高齢者であり、高齢者の中には機能の回復や日常生活の自立を目指す者もいるが、多くは機能の維持を目指し、何らかの援助を受けながら、生活をしていく高齢者である。多くの高齢者は自分の生活を自分なりにこだわり決めていくことを強く切望している一方、自分のことができなくなって人に頼らざるをえない状況になると、自分のこだわりや意志を封じ込め、他者にお任せしてしまう傾向が見られ、このような状況は、援助者の関わり方によって生み出されることも少なくない<sup>10)</sup>。学生は援助の頻度として多い、排泄や入浴の援助を通して、自尊心をそこなわない援助について考える機会が多かったと考えられる。高齢者の特徴を捉える視点のひとつに【援助を受けることで生じる気持ち】があり、そのことから【自尊心をそこなわない援助】の重要性について学べたと考えられる。

【老化や障害への援助】、【予防的看護援助】については、学生が受け持つ高齢者は、老化や身体機能の低下、生活機能障害をもっており、ひとつの疾病や障害が、二次的な障害を引き起こしやすく、日常生活に大きく影響する。高齢者の特徴を捉える視点としても【老化の影響】、【身体運動機能の変化の表れ方】、【健康問題の生活への影響】があり、看護を展開していく中でその重要性を学んでいったと考えられる。

【痴呆症をもつ高齢者の理解】については、学生が受け持つ高齢者の中に痴呆症を持つ高齢者が含まれており、学生はこの実習ではじめて、痴呆症を持つ高齢者に接し、戸惑う中で、痴呆症を持つ高齢者を理解する方法を試行錯誤し、痴呆症をもつ高齢者の世界を理解することではじめて、援助が行えることを実感したと考えられる。

【家族への援助の必要性】については、学生自身が実際の場面で、家族に対して援助することは、短い実習期間であり困難であるが、訪問看護の場面や老人保健施設でこれから高齢者の生活を考えた時に、家族介護者を含めて考える必要があり、そのために、看護者が情報提供や介護負担に対する配慮している場面をみて、学生は家族を支えることの大切

さに気付いたと考えられる。

【様々な職種との連携】については、老人保健施設で高齢者のケアに参加する中で、個々の高齢者に対する様々な職種の連携を学び、介護職と看護職、ソーシャルワーカー、理学療法士、作業療法士の理解が具体的になっている。又、職種間の連携によるチームケアが具体的に実施されるカンファレンスの場面から、高齢者のケアには、連携による総合的なケアが不可欠であると実感し、看護の果たす役割や質が問われることを実感している。また、訪問看護部門における在宅ケアを支援する場面での職種間の連携では、訪問看護以外のサービスが利用されている状況を見る機会はほとんどないが、訪問看護婦以外の他のサービスの利用があって生活が成り立っていることを学んだと考えられる。

### 3. 今後の実習指導のあり方

老人保健施設と訪問看護部門の実習で、学生は、高齢者の特徴と老人看護の特性をそれぞれ8つの視点から捉えていた。個々の学生によって把握の仕方は、様々であるが、いくつかの視点から高齢者の特徴を捉えて、それを手がかりに高齢者の理解を深め、その人らしい生活に向けての援助の必要性を実感し、老人看護の特性を捉えていた。板垣ら<sup>11)</sup>は病院を実習場所とした場合、どうしても疾患中心の看護になりがちであること、松田<sup>12)</sup>は特別養護老人ホームの場合、高齢者の精神的な特徴に関心を寄せ、個を尊重したケアの提供を学んでいるが、健康障害に関してはほとんど注目していないことを述べている。老人保健施設は病状安定期にあり入院の必要はないが、リハビリテーション、看護・介護を中心とした医療及びケアを必要とする高齢者を入所対象としている。そして老人保健施設の目的は、高齢者の自立を支援し、家庭復帰を目指すことである。そのため、老人保健施設に入所する高齢者を対象に実習した結果、学生の学びは、高齢者を全人的に理解することの意味やその必要性を実感したり、高齢者の生活に視点をあてた看護が学べたと考える。また、老人保健施設や訪問看護部門は、多職種との連携の場が多いため、学生は、その中で看護の役割を学べたと考える。また、高齢者が生活する施設と在宅の両方の場を見ることができると、継続的な看護の視点を得られたと考えられる。

学生は、実習の中で、高齢者と自分の関わりやそ

の実習場で行われているケアをみて、実習終了時のレポートによって実習で学んだことを振り返る事で、学生自身、高齢者の特徴や老人看護の特性を把握していったと考えられる。学生が高齢者の特徴や老人看護の特性を捉える視点は、出会った高齢者やケアの場面、学生のレディネスによって、異なってくると考えられる。今後は、学生の視点が広がるきっかけとなるような場面の予測と提供、その場面を意味

付ける時間をタイミングよく確保することが重要であると考えられる。さらに、学生の既存の知識を援助につなげるために、学生が高齢者の特徴や老人看護の特性をどの視点から捉えているのかに着目し、その内容・意味を学生がどのように理解しているかを明らかにし、そこから視点を広げ、老人看護の理解が進むような指導方法の開発が課題であると考えられる。

## 引用文献

- 1) 鎌田ケイ子：新版看護学全書 第30巻 老年看護学、第2版、42、1998
- 2) 平松喜美子：老年看護学臨地実習の有効性と方向性－学生が抱く老人イメージ－、看護展望、829－836、1999
- 3) 山本洋子、安藤詳子、中武美江：老人看護学実習で学生が学んだ内容に関する研究Ⅰ－学習内容と実習前後の老人に対するイメージの変化との関連－、日本看護研究学会誌、21(3)、268、1998
- 4) 板垣恵子、菊地史子、斎藤ひろみ：老年看護学実習の課題に関する考察、東北大学医療技術短期大学部紀要、8(2)、153－160、1999
- 5) 松田光信：特別養護老人ホーム実習における看護学生の学びについて、看護教育、40(5)、378－383、1995
- 6) 大淵律子：老人看護実習での学び－老人福祉施設実習からみた効果－、東京都立医療技術短期大学紀要、9、157－168、1996
- 7) 矢口みどり、大下静香、大森武子：学生のレポートから行動姿勢を読み取る、看護教育、39(6)、430－434、1998
- 8) 前掲書1)、42
- 9) 「看護教育」編集室編 永田久美子：老年看護学、第1版、医学書院、52－57、1996
- 10) 林崎光弘、末安民生、永田久美子編：痴呆症性老人グループホームケアの理念と技術、バオバブ社、47－50、1996
- 11) 前掲書4)
- 12) 前掲書5)